

ニューズレター11月号:ハイブリッド印刷 二つの世界でベストを狙う

American Printer, Oct 1, 2002

我々は常に先端を走り続けている、と商業印刷会社の Miller Johnson Inc.社 (Meriden, CT)の CEO(社長)である Ron Ward は言う。1936年に創業以来、この70人規模の会社は活版印刷からオフセットへ、今、デジタル印刷へと変ってきた。8年前にデジタル市場に参入したが、顧客から急き立てられ、顧客のニーズを満たすべくこれに踏み出切ったのだ。

「納期がきつくなってきて、伝統的なオフセットでは顧客の目指すゴール(納期)をこなせられなくなってきたのだ。」と Ward は説明する。

同社は Indigo デジタル印刷機で始めたが、その技術的な諸点と冴えない印刷品質により小ロット、短納期は壁にぶち当たった。「最初にデジタル印刷に入ったとき、その品質は今一であったので、できる仕事はわずかであった。」「でも、品質は今や、オフセット並になった。」と社長は言う。

同社の印刷室には、3台の菊全 MAN Roland (Westmont, IL)700 枚葉機があるが、1台は水性コーターとコンピューター制御インターフェイス(CCI)のコンソール台付き、6色両面機、1台は、2/2・4色兼用機、もう1台はCCIつき6色機である。

Miller Johnson 社はデジタルの方では、Heidelberg 社 (Kennesaw, GA) の 13'×18 'サイズ(A3)Quickmaster DIダイレクトイメージ機、1台、Xerox 社(Rochester, NY)の DocuTech の 6135 モノクロ、custom-document publisher を入れている。これは 14 × 17 インチ(A3)まで、110 ポンドまでの用紙が通り、A4 では分速、135 枚のスピードが出る。同社はプリプレス部門一式、製本部門と出荷部門まで持っている。最近まで同社はオンディマンド印刷専門の子会社、Miller Johnson Digital 社を運営していた。その子会社は親会社の運営に組込まれていった、と Ward は説明する。

予算と合うパーソナリゼーション(個別化印刷)

昨年、Miller Johnson 社は 5 点の PIA (Alexandria, VA) Premier Print Awards(PIA 特別賞)を獲得した。ハイブリッドと可変データデジタルプリント分野の大賞として 2 点もあった。部門最高賞の基準としてその仕事が完璧無傷であるとしている。Miller Johnson 社が勝利したハイブリッドの仕事とは、オフセット印刷したポケット・フォルダーの中に 12 種類のデジタル印刷したブローチャーが入っているのだ。このフォルダーもブローチャーも、オフセット機とデジタル機の両方にかける必要はなかったが、同社はハイブリッドの仕組みにこだわった。「それは小ロットで顧客は価格を下げてくださいとの意向であった。」と Ward は説明する。「仮に普通のやり方で行うと、予算内には収まらなかっただろう。」

Miller Johnson 社は 300 冊のフォルダーを全判にして 6 色 MAN Roland 機で印刷し、ブローチャーはドキュテック 6135 で製作された。

同社は数種の仕事をデジタル機とオフセット機の両方にかけて印刷しているが、Ward は、

同社全体の 5%の仕事はハイブリッドだと言う。同社はクリスマスカードの外装を 6 色 MAN Roland で印刷し、保険会社の各部門の情報はデジタルで刷りこみをした。

他の事例として自動車メーカー、スバルの観音開き、従業員向け補償ブローチャーであるが、基本模様は 6 色 MAN Roland で印刷し、従業員の貢献度、健康、歯科保険補償範囲、401K 貢献度などの個別属性データを DocuTech で刷りこむ。

しかし、挑戦には改革が伴う。オフセット印刷とデジタル印刷の組み合わせは正反対同志の結合である。前者はインキと水を中心とするもので、後者はトナーを熱で溶かして紙に再現するものである。枚葉機をくぐるインキと紙は、デジタル印刷機の環境とも合ってくれ、また、それに耐えられる資質を持つことが肝要だ。

技術的な配慮

「普通の印刷のあとに DocuTech を通すときに、インキ模様部の上へのトナー印刷に注意を払わないといけない。」彼が言うには、ある仕事では、インクが相当のった刷り込みなども行っているが、これはあくまで試行錯誤で行う、と。重要なことはニスを引かないことである。

「ハイブリッド印刷は非塗工紙に行なうのが良い。」特に蜜蝋を含まないインキではよい、と社長は続ける。と言うのは、つや消し塗工紙ではデジタル刷り込み中に傷をつけやすいので、同社はハイブリッド印刷ではこれを避けている。Miller Johnson 社の DocuTech は 12 ポイント(0.42mm)までの厚みのメディア(紙)を受付け、12 × 18 インチ・サイズ、25～10000 枚の範囲のロットものをこなしている。

デジタル印刷機での最初の経験から、同社はデジタル印刷機の指揮監督を枚葉オペレーターでなく、プリプレスの従業員に指名した。「コンピューターの技術経験を持つ者がいなくてはいけない。」と、Ward は言う。「色の識別感を持ったプリプレスの人材をデジタルプレスに配置し、これが成功した。彼らを機械に目を向かせることも重要である。」

まず、組織化

ハイブリッド印刷が成功するには、教育訓練の下地が鍵となる。「まず、組織化すること」と、Ward は言う。Miller Johnson 社が最初に、ハイブリッド印刷を始めて行ったとき、インディゴを後乗せする数点のオフ刷り骨格の仕事が不用意にも、製本の方に先に回ってしまった。今ではハイブリッドの仕事が通常で印刷されたら、その指示書(job ticket)はデジタル印刷と印が入れられ、この仕事は工場内のデジタル印刷の方に回される。

このような混乱により、ある方々はハイブリッド印刷を驚きの目で見られようが、Miller Johnson 社の Ward は文句も言わない。「これは現実的には大変有用だよ。」と、社長は言う。「これは顧客にもっとコスト優位性をもたらし、我々には製造コストを下げてくれるのだ。それで普通の会社ができないサービスをわが社は提供しているのだ。」(訳 T.I)